教科の枠を超えた
「読めない子」の問題について
～第43回論文審査を終えて～

審査委員長　**菊　池　龍三郎**

１．応募状況について

今年度は111編の応募がありました。本県内に毎年100人を超す先生方が多忙な中でも応募して下さることは嬉しいことで、私達にとって励みとなるものでした。数枚の原稿でさえまとめる時の苦労は誰もが身にしみてわかっており、それだけに本論文集で紹介された方々だけでなく、応募された全ての先生方に心からの敬意を表します。

２．選考結果と主な受賞論文の紹介ー期待される改善点も含めて

審査の結果は、最優秀賞１編、優秀賞６編、優良賞17編、奨励賞３編でした。

最優秀賞は土浦市立中村小学校校長百瀬初江先生を代表として、学校全体で取り組んだ共同研究「児童の確かに読む力を高める国語科学習指導の在り方（２年次）～説明的文章における読み取ったことを段階的に書く活動を通して～」でした。

児童生徒に確実に「読む力」を育てようと学校全体で取り組み、同時に教師一人一人の指導力の向上をも図ろうとした意欲作でした。この研究テーマの背景にあるのは、今や国民的課題となった説明的文章が正確に読み取れない児童生徒をどうするかの問題です。

先生方が日々の授業の中で感じている国語能力の実態から、児童生徒の「国語を理解する力」と「国語を表現する力」の育成にねらいを絞る必要があるとしてテーマを設定し、継続的に取り組んだ研究です。ふだん私達が当たり前のように口にする児童生徒の「読み取ったことを書く活動」という活動単位は、より丁寧に「読む」と「書く」の両面から分析すると、「確かに読む力を高めるための書く活動」と、「読む力を活用して書く活動」の２段階の活動単位として捉え直すことができ、２段階として活動を捉えた方が効果的であるとし、この２段階を「確かに読む」をキーワードに単元として構成し、実際の授業計画に落とし込み、実践し結果に基づき仮説を検証しています。優れた研究でした。さらに共同研究に参加した先生方一人一人が、自分の指導力が付いたと確かな実感が持てるように、研修の充実にも努めている点なども他校の参考例になるものと高く評価されます。

次に、優秀賞を受賞された６編の論文はいずれも問題意識が明確な上に研究計画や研究の進め方も確かで、観点や方法にも新鮮さが感じられる意欲作であったと思われます。

①９年間の内容をそれぞれの学習適時期、つながりや連続性等をもとに一覧表とするなどカリキュラムの〝見える化〟〝視覚化〟を図り児童生徒の深い学びを実現しようとした守谷市立守谷中学校黒井孝弘先生の研究、②国際化が進む中でこれからの平和学習には、人類の負の遺産を取り込んだダークツーリズムの観点と方法が必要であるとして実際に授業で試行的実践を試みてきた守谷市立御所ケ丘中学校の土屋啓一先生の論文、③児童生徒が歴史学習において、より主体的に「当事者意識」をもって多面的に取り組める学習スタイルとして「インバス

ケット方式」を提案した日立市立成沢小学校の西野純平先生の論文、④自然数は素数の積として表わせることから生徒が数の性質、数の不思議さから数の規則性に興味を持って考える力を養おうとした茨城大学教育学部附属中学校の菊池康浩先生の論文、⑤６学年の理科学習における「水溶液」や「電気」の性質に関する学習にプログラミング教育の手法を取り込むことで児童生徒の確かな問題解決能力を育てようとした古河市立大和田小学校の谷田部幸愛先生の論文、⑥音楽科における表現や鑑賞において、自分の印象や思いをどう言葉で表現するか、音楽科の特質に応じた言語表現力をどうつくるかに迫った桜川市立岩瀬小学校の海老沢左知子先生の論文、これらはいずれも相当な意欲作、力作でした。ただし、それぞれ改善すべき点もあると思いました。あえて１点だけ、海老沢左知子先生の授業研究は、音楽科の応募はめったにないこと、論旨も明快で何をどうやったかのプロセスも分かりやすい論文であるためこれを取り上げさせて頂きます。

先生は、子ども達の表現力を増すために、児童のヒントになるカード（〝玉手箱〟）を示します。鑑賞内容のレベルが高くなるに従いカードの表現内容も豊かにします。子ども達もそれを参考にして、味わい方、表現の仕方がより豊かになっていった、という研究です。研究のねらいは明快で進め方も手堅く高く評価されるものでした。ただひとつ残念だったのは、研究がここまでで終わっていたことです。実は海老沢先生だけでなく他のほとんどの論文も「できるようになった」ところまでで、その確かめの段階がなく終わっています。審査に当たった私達が思ったことを、授業理論に詳しく現場の先生方の授業研究を沢山指導してこられた大髙泉先生の指摘を借りて紹介してみます。

ここで先生が使っている授業の手法は、簡単に言えば、児童の鑑賞力、表現力が一段一段高まっていくように、先生が色々な言葉が記された参考カード（〝玉手箱〟）を示し、児童はそのカードを参考にしながら自分の考えや印象に合った表現を考えていくというものです。ここまでの授業を支えている学習理論は、児童にひとつひとつ「足場」を掛けてやることによって児童の理解のレベルが高まるよう手助けをする、いわゆる「足場掛け」という理論です。しかし、児童への支援はここまででよいのか。授業研究としてはこの次の段階、ひとつひとつヒントを与えていくのとは逆に、ひとつひとつヒントや支援を少なくしていっても児童ができるようになったことを確かめる「足場外し」の段階も必要で、その段階があったら、この研究は申し分ないということです。

３.「教科書が読めない子」の問題…最優秀論文との関連で

実は、最優秀論文との関係で思い出すことがあります。これは今回の表彰式での講評の時も含め色々な機会に触れてきたことでもあります。

数年前のこと、現場の先生方の研究会があり、会員の高木輝夫先生が紹介してくれたのがジャーナリスト江川紹子さんのブログ「大事なのは『読む』力だ！～４万人の読解力テストで判明した問題を新井紀子・国立情報学研究所教授に聞く」でした。新井先生は著名な言語学者・数学者ですが、一般にはＡＩは東大に合格できるかのあの〝東ロボくん〟プロジェクトのリーダーとして知られています。しかし、近年ではむしろ４万人以上の人々を対象に行った実態調査から明らかにした「教科書が読めない」子ども達の広がりとその原因分析で大変注目を浴びている方です。

さて、江川さんは、仕事柄ツイッターで自分の意見を発信する。それに対して当然、賛否様々

な反応が返ってくる。一定層からの批判や非難、揶揄や侮蔑、罵倒の類いが押し寄せる時もあるが様々な考えがあって当然なので、不思議でもなんでもないが、中には、トンチンカンな反応が少なくない。自分が書いてもいないどころか、考えたこともない「主張」に激しく反論するものもかなりある。どうも「私の書いたことの意味が分かってないのではないか？！」「文脈が読み取れていないのではないか」と気づいた江川さんと新井先生の対談が実現しました。

新井先生は、とんでもない反応をする人、つまりきちんと読めない人には共通の原因があると言います。４万人以上の人が受けた読解力テスト（ＲＳＴ）では、①主語述語や修飾語被修飾語など文を構成する要素の係り受けの関係の理解、②「それ」「これ」などの指示代名詞が何を示すかの理解、③２つの文が同じ意味かどうか判断する力、④体験や様々な知識を動員して文章の意味を理解する力、⑤文章と図形やグラフを比べ内容が一致するかどうか認識する力、⑥文章で書かれた定義を読みそれと合致する具体例を認識する能力、等について調べたとのことです。いずれも読解力の基礎と言ってよい力だと思います。

江川さんの疑問に対して、ＲＳＴの結果に基づく新井先生の話は衝撃的で、現状は「教科書が読めてない子がたくさんいる、ということです。…文章を読んでいるようで、実はちゃんと読んでいない。キーワードをポンポンポンと拾っているんです。○○と○○と○○という言葉が出てきたら、こんなもんだろう、というような。『……のうち』とか『……の時』『……以外』といった機能語が正確に読めていない。」として、ズバリ「実は、それはＡＩの読み方に近いこと、そして子ども達の読み方がＡＩの読み方に近いこと」と指摘します。しかし、ＡＩと聞くと素晴らしいとアタマから信じてしまう私などには、キーワードだけで全体を読み取った気持ちになってしまう「ＡＩ読み」の弱点や問題は、にわかには信じられないことでした（※）。

お二人が危機感を共有するのは、教科書が読めないとやがて社会的格差、特に経済的格差につながりかねない、例えば運転免許試験をパスするのが難しくなったりして、選べる仕事の幅が狭くなってしまうかもしれないからです。そう言えば、私が受けた半世紀前の運転免許の学科試験でも、「～のうち」、「以外の」、「～でないもの」等々の〝ひっかける〟問題が少なくなかった気がします。新井先生が「機能語」と呼ぶ指示代名詞、接続語などで、これらが正確に理解できないとＡＩ読みになってしまうと言います。

学校の授業などで、生徒達が先生の指示で文章を読みながら大事だと思う箇所にテンポ良く色ペンでチェックを入れていく場面をよく見かけます。私などその光景はこれからのあるべき効果的な授業のように思えて感心していたのですが、お二人の危機感に触れると、“待てよ”という気持ちになります。

私にもこれと関係すると思われる経験があります。授業で２つの資料を読ませて学生に自分の意見を話させるのですが、含まれている内容は相当に違っているにもかかわらず、２つの資料の違いはあまりないと答えた学生が数人いたため、その理由を尋ねたのです。どうやらどちらにも同じキーワードがいくつも使われているからあまり違わないという答のようで、次の言葉に窮した記憶があります。

今年度の審査を通じて、しっかりした読解力を育てるという教育目標は、国語科だけの話ではなく各教科を通しての大事な課題であることを改めて痛感しました。

（※参照　URL：https://news.yahoo.co.jp/byline/egawashoko/20180211-00081509/）